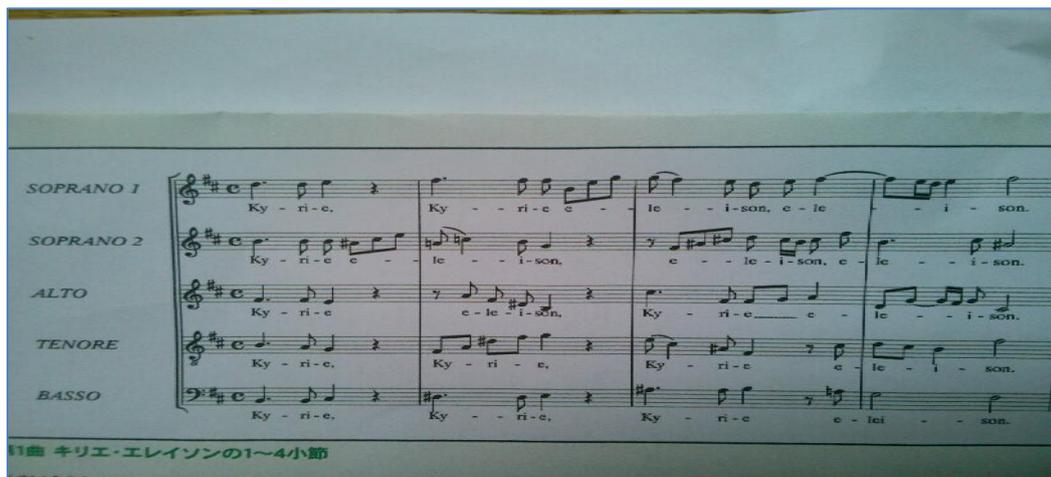


中山 妙子

### その1. キリスト教音楽から

宗教改革者マルチン・ルター（1483～1546）は「教会音楽の目的はキリストの言葉を音楽（詩と賛美と霊の歌）に込めて表し、J.S バッハ（1685～1750）は彼の聖なる音楽性から、数々の名曲を生んだ」と提唱している。ルターの提唱の後年 18～19 世紀、現代に至るまで、クリスチャンでない全世界の一般人の心をつかむバッハやヘンデル（1685～1759）などの作曲家が育ったことは、キリスト教独自の音楽性であり、他の宗教にみられない芸術資産です。代表曲はバッハの口短調ミサ曲と考えます。その第1曲キリエ・エレイソン=この「キリエ」は「主よ、神よ、父よ」、「エレイソン」は「あわれみたまえ」とのメッセージと訳すことができます。（山本 剛氏：打楽器奏者の「教会音楽の楽しみ」を参照）



バッハは民族や教派を越えた信仰の曲という意味で当時の世界共通語ラテン語を用いて表現し、ミサ曲はバッハの最晩年の作です。そして今日の日本の音楽大学でも多く指導に受け入れられています。言葉だけで論的に思想を伝えるのではなく、音楽により歌詞・ことばがより効果的に、人々の心に響かせたと思います。表現方法 ABCD→E→DCBA（「イエスの御名において」を例にする）の対句法と言葉の活かし方に特色あり、宗教性を音楽に生かす才能を日本の音楽家も強く影響を受けたと思います。さらにモーツァルトとベートーベンも、カトリックの環境にて、深い信仰心が「荘厳ミサ曲」に生かされています。日本には明治時代に西洋音楽が導入され教育に浸透します。その後、21世紀の日本で「日本ら・し・さ」に見られる聖歌をもっとも古い賛美歌と比較して、私が感動した“いばらの針の”の楽譜を紹介します。

## ♪いばらの針の（バッハのマタイ受難曲の内：コラール）

109 155

いばらの針の  
いばらで冠を編み、頭にかぶらせし  
(マタ27・29)

〔受難〕

Salve Caput cruciatum (I)  
(O sacred Head now wounded)  
BERNARD of CLAIRVAUX, 1091-1153 (UN)

HERZLICH THUT MICH VERLANGEN (Orig. d minor)  
HANS L. HASSLER, c.1601  
Har. by J. S. BACH, 1685-1750

♩=72

1. いばらの はす り の さあ さい りん べを  
2. いかに しや す べ の きあ い す る 主を  
3. 死ぬ まぎ わ に も あ お が し め よ

おき も き う れが いた に た れに さ せ たい もう  
十 み 字 は 架に わ が た き めし 死に み が す ます たいが ぬた

### その2. 瀧廉太郎「荒城の月」

日本音楽作曲家を代表する瀧廉太郎（1879～1903）は幼少期に横浜に住み、バイオリン習得から西洋音楽に親しむ環境にあり、父の仕事の関係で富山・東京・九州へ在住し、21歳でキリスト教の洗礼を受け、ドイツ・ライプチヒ音楽院に留学したころ、肺結核にかかり24才の若さで生涯を終えます。彼の青春時代に作曲されたのが「荒城の月」であり、ベルギーのシュブトゥーニュ修道院の聖歌として用いられたことは、あまり知られていないが、私は、彼の“キリストにある平安と喜びを伝えたい”という祈りの表れであろうと思います。

さらに瀧廉太郎の功績は、1900年に発表された「組曲：四季の中の“花”」の序文で、日本語の詩にあわせた曲づくりの大切さを“即我歌詞に基づき作曲”という形で主張されています。

つぎに、言文一致の歌づくりの姿勢が「花＝♪春のうららの隅田川・・・」や「お正月＝♪もういくつ寝るとお正月・・・」など文語体でなく口語体で、言文一致の歌づくりを尽力し、心・風景・情景・風習を作詞、作曲に生かして、誰にも愛される日本の歌づくりを推進した若者であり、今日まで伝承される曲を遺作として、若くして他界したが、日本音楽の「日本ら・し・さ」に大きな貢献をしたと思います。

この後、現代までの音楽家は「日本語」の持つ味わい深さと向き合い、西洋音楽を融合しつつ作曲する時代となりました。

### ♪ 荒城の月

春高楼の花の宴 めぐる盃かげさして

千代の松が枝わけいでし 昔のひかりいまいずこ

天井影はかわらねど 栄枯は移る世の姿

写さんとてか今もなお ああ荒城の夜半の月

(作詞：土井晩翠と作曲：滝廉太郎の二人はロンドンにて出会いました。)

### その3. 神道の雅楽から

箏（ひちりき）の代表的奏者：安部季昌氏が「雅楽 箏 千年の秘伝」の書籍で=永遠や無限の生を暗示する箏の持続音は人間の呼吸と結びついている。箏は人間の持つ普遍的エネルギーを歌に変え、浮揚するがごとく旋律を奏でる。また龍笛は天と地を繋ぐような音を出す。そして、琵琶や箏の響きは相対的な時間の流れを打ちものとして形成している。=と述べて見事な雅楽音の表現分析をされていて、私は（日本音楽を箏の弦楽器と西洋楽器が共演する形式で作曲しているためか？）、よく阿部氏の理論が理解でき、心から敬意をもち、感服しています。

#### 雅楽と箏曲の旋律の音の表

九孔	律度	律名	西洋の音名	
九	下無	双調	E <sup>b</sup>	D
八	角	呂	C <sup>#</sup>	C
七	商	太食調	H	A <sup>#</sup>
六	宮	平調	A	A <sup>b</sup>
五	羽	黄鐘調	G	F <sup>#</sup>
四	商	雙沙調		
三	角			
二	宮			
一	羽			
下無	角			

律と孔の関係図

九孔  
律度  
律名  
西洋の音名  
六調子  
律

九孔の音階  
現在、雅楽には十二律・六調子あるのですが、中国の音楽家に影響を受けて「雅楽の音階」に中国の音階はないと習得するそうです。これは、雅楽が日本化したことにより、その音階も中国の音階から取り除かれたためです。そのような雅楽の各調の特色ある旋律を知ることで、その雅楽の特色を知ることができます。そのように旋律を知るには、五声、七声を各調で知っておく必要もあります。

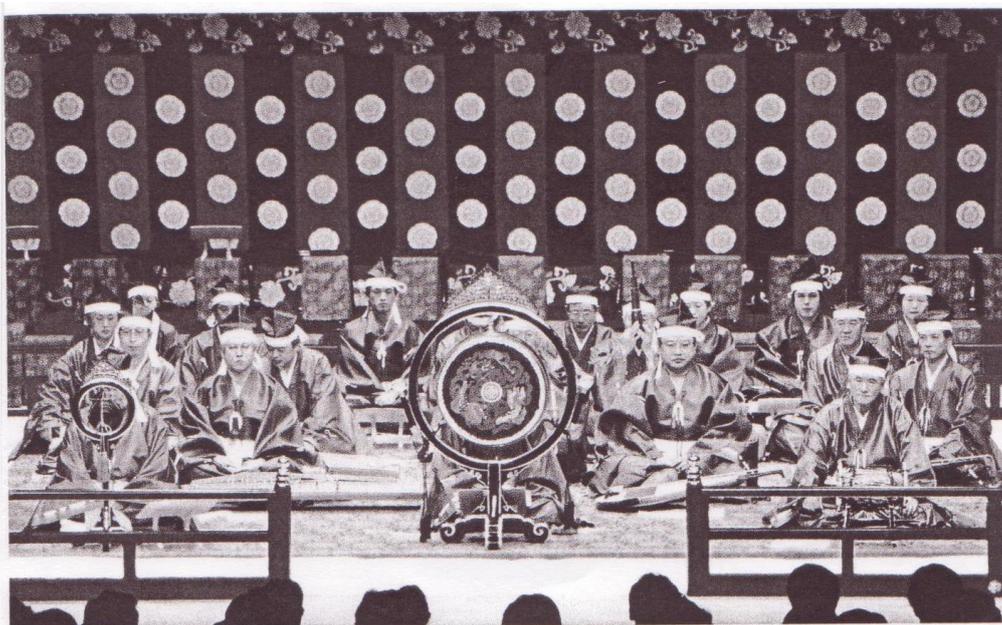


私は音楽を、意志伝達の一つの表現方法と考えます。日本教育に西洋音楽教育が導入されてから、絶対音感教育が導入され現代教育まで、世界民族音楽を楽譜で紹介されたことは音楽教育の高度化、発展に重要な役割を果たしました。しかしながら、日本には古くから、雅楽のように、自然現象の生命エネルギーを音楽として表現し、日本歴史社会に生活の根源として生かされ伝承されて来た事は、日本民族音楽に不可欠の価値と思えます。

平安時代に大成した雅楽はアジア大陸から伝来した歌舞と日本古来の歌舞（うたまい：発音）が発展した世界であり、国家の祭祀に生かされて来ました。神道の神楽舞を私も幼少期に舞う機会があり、何とも高貴で神秘的な音源が思い出にあり、現代社会の庶民的な音楽に導入される機会が少ない事を残念に思う1人です。

私は30年間かけて、日本音楽文化を紹介する目的で世界数十か国の民族音楽と交流して来ました。日本音楽の「ら・し・さ」を森・里・海の自然音源で表現している、神秘的な魅力を持つ雅楽文化を、もっと理解しやすい教育方法で、宗教役割を離れた分野で、純粋な日本民族音楽として、今後の文化交流に紹介される事を願っています。

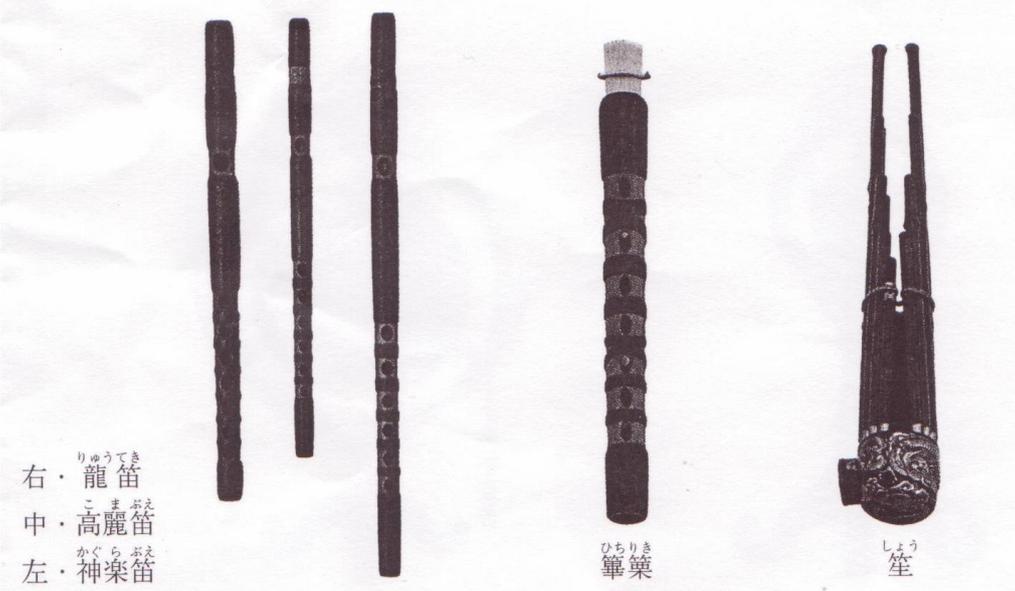
◎楽器の紹介



管絃の演奏

舞のある時は舞樂ぶがくと言い、舞を伴たわない雅樂を管絃ぶくわんと言う。舞樂には絃樂器がつかないが、管絃は絃樂器もついたフルオーケストラ。源氏物語の時代、舞樂は儀式やイベントで、管絃は貴族の日常生活の楽しみとして演奏されることが多おかった。

1. 管樂器



#### その4. 仏教音楽から

元来、音楽を言葉と理論で説明することや、比較することは難しく、生演奏を聴き、感じた内容に優るものは無いと云えます。絶対音感を論じるよりも、創作者のテーマへのイメージ表現から創作された作詞・作曲を生演奏で鑑賞して、心に感じる事が、何より大切だと思います。それは宗教音楽に特に強く感じています。

仏教音楽は自然風土の異なる地域や民族の儀式と共に、日本にはアジア大陸（インド～チベット・中国～朝鮮半島）経路で大乘仏教の伝承発展という中で育ちました。

浄土真宗：明覚寺住職の林要昭・要順氏に協力いただき、調査をした中で、私が興味を持っていたのは「仏教の布教活動では西洋宗教（例えばキリスト教：讃美歌が宮中権力に保護された歴史）にみられるような音楽を利用して布教する必要性が薄かった」という意見でした。しかし、音楽史の古代～現代で、世界東西には宗教とともに、建築・絵画・彫刻・工芸・音楽などの創造芸術が育てられたことは歴史が証明しています。

#### ●声明（聲明：しょうみょう） ●和讃（わさん）

神道雅楽、仏教音楽の長い歴史に続いて、明治以降に「仏教讃歌」が生まれた経緯は、西洋文化の伝来による素晴らしい影響と云えます。親鸞聖人が当時の「今様：一般民が誰も理解できて、口ずさめる」の節・旋律に和讃を書かれた「正信偈和讃」は現代社会まで伝承発展し、仏教の布教の役割を担いました。

「正信偈和讃」の一部を次頁に掲載します。正しい日本音階（日本ら・し・さ）が語句の横に併記して表現されています。前述紹介した明覚寺住職の林要昭氏が正確な音程で唱えて頂いた時は、とても感動しました。（つまり、現代の私達の生活に、仏教が音楽の形で年代問わず解りやすく、庶民的な形で浸透していなく、初めての体験に感動）

親鸞聖人がその主著「教行信証」にみずからの信心を述べ、如来の徳を讃えて、うたいあげられた讃歌が三百首ある中の「正信偈」の最初の部分を音の表記と楽譜とともに一部に掲載しました。

表現方法における西洋音楽と日本音楽の顕著なちがいの特色は、

1. 感動して旋律を創作する原点のリズム、音域が理論的であるのが西洋音楽、あくまで自然大地のリズム、音域を重視したのが日本音楽である。
2. 美しい島国風土と侵略されることの危険が少なかった歴史を持つ日本の宗教は森・里・海のあらゆる自然に生命息吹を認めて、生活の安全祈願を求めて、声にしたのが「日本ら・し・さ」であると思います。
3. 楽器の種類や形態、材質は民族の風土条件と深く関係しています。乾燥した西洋風土では気温・湿度に影響が少ない管楽器が誕生し、理論性ある創作に適していたが、温帯モンスーン地帯の日本は気温・湿度に優しく対応できる木製の和楽器が誕生し、自然の生命息吹を表現する創作が日本音楽の「ら・し・さ」に生かされ、生きたと思います。

磬一音  
♩ = 50 次第に速く

調声 同音

きみょうむりょうじゅうにはらい なもふかしぎこう  
ほうぞうぼきつゐんにじ ざいせいざいおうぶつしよ  
とけんしよぶつじょうどいん こくどにんでんしぜんまく  
こんりゅうむじょうしゅうしょうかん ちやうほつけうだいぐぜい

(調双) 徴

在<sup>ざい</sup>世<sup>せい</sup>自<sup>じ</sup>在<sup>ざい</sup>王<sup>おう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>所<sup>しよ</sup>  
法<sup>ほう</sup>藏<sup>ざう</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>因<sup>いん</sup>位<sup>い</sup>時<sup>じ</sup>  
南<sup>なん</sup>无<sup>む</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>光<sup>こう</sup>  
歸<sup>き</sup>命<sup>めい</sup>無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>壽<sup>じゆ</sup>如<sup>にょ</sup>來<sup>らい</sup>

開<sup>かい</sup>入<sup>にら</sup>本<sup>ほん</sup>願<sup>がん</sup>大<sup>だい</sup>智<sup>ち</sup>海<sup>かい</sup>  
光<sup>こう</sup>明<sup>みやう</sup>名<sup>な</sup>號<sup>ごう</sup>顯<sup>けん</sup>因<sup>いん</sup>緣<sup>えん</sup>  
矜<sup>きやう</sup>哀<sup>あい</sup>定<sup>じやう</sup>散<sup>さん</sup>與<sup>よ</sup>逆<sup>ぎやく</sup>惡<sup>あく</sup>  
善<sup>ぜん</sup>導<sup>だう</sup>獨<sup>どく</sup>明<sup>みやう</sup>佛<sup>ぶつ</sup>正<sup>しやう</sup>意<sup>い</sup>

参考資料:書籍

- 「聖書」新改訳
- 「聖歌」日本教会音楽研究会
- 「大作曲家の信仰と音楽」P.カバノー著
- 「文化芸術の経営・政策論」枝川明敬著
- 「絶対音感」最相葉月著
- 「生田流の箏曲」安藤政輝著
- 「聲明集」「正信偈和讃」本願寺出版協会

研究調査協力者

- 大引毅代史 (日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団：氷見教会牧師)
- 大引巻代 (日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団：氷見教会牧師)
- 宮樹澄男 (十社大神：宮司：射水市)
- 宮樹克文 (十社大神：神職：射水市)
- 林 要昭 (浄土真宗：明覚寺住職：高岡市)
- 林 要順 (浄土真宗：明覚寺住職：高岡市)
- 徳島達也 (日本文化交流センター研究員：日本音楽奏者：富山市)
- 碓井綾子 (日本文化交流センター研究員：piano 音楽奏者：射水市)